

中國共產黨による黨史資料編纂の歩み

——一九五〇年代の雑誌『黨史資料』を手がかりに

石 川 禎 浩

はじめに

- 一 人民共和國成立前における黨史資料の収集・編纂
 - 二 『黨史資料』の編輯・出版
 - 三 『黨史資料』収録資料の改變問題
- おわりに——『黨史資料』改變資料の後世への影響

はじめに

二〇一三年、中央檔案館と中共中央文獻研究室の共編になる『中共中央文件選集（一九四九年一〇月～一九六六年五月）』が人民出版社より刊行された。時期的には、中華人民共和國の成立から文化大革命開始までの、いわゆる新中國十七年と稱される時期に、中國共產黨中央の名義で出された決定や指示などの文書約四千五百點を、五〇冊に収めた大型の文獻資料集である。公刊の『中共中央文件選集』⁽¹⁾としては、結黨から一九四九年までの文書を集めたもの全一八冊が、二十年ほど前に出版されているから、系統的にはその續集ということになる。これを受けて今後さらに、「十年動亂」と呼ばれる

文革時期にまで文献集の刊行が進んでいくのかは不明だが、結黨以來すでに九十年を超え、また執政黨としても六十年以上が経っている中國共產黨（以下、適宜中共と略稱）は、今後も黨の存続する限り、こうした歴史的公式文書の編纂・刊行を繼續していくことだろう。

中共にとって、歴史文書や資料の編纂事業は、過去の文書の整理にとどまらない大きな政治的意味を有している。黨の歴史を研究することは、大局的には、過去を正しく認識し、そこから教訓をくみとり、未來へとつながる革命事業に正しい展望を與えるという實踐的意義を有しているからである。毛澤東が一九四二年に、中共黨史を研究する意義について述べた言葉「黨の歴史を明確にしなければ、黨が歴史の中で歩んできた道を明確にしなければ、物事をさらにうまくやることはできない」^②は、それを平明に言い表したものである。

また、黨史は——中國のいわゆる「正史」がそうであったように——黨、あるいは時々の指導者たちがその正當性や權威を根據づけるための重要な手段でもあった。一九四二年の毛澤東が黨史研究の意義について語っただけでなく、歴史文獻の編纂や黨史敘述の大枠作りを自ら行ったのも、従來の路線の誤りを指摘し、おのれが代表する正しい路線をそれに對置せんがためだったことは、ほぼ間違いない。それゆえ、黨史はしばしば黨の路線闘争や權力闘争を浮き彫りにし、あるいはそれに利用されてきたのである。そして、それがクライマックスに達したのが、黨の歴史を「十回の路線闘争」に集約する歴史敘述が生まれた文化大革命の時期であった。この時期、我々が考えるような意味での黨史研究や黨史資料の編纂は、ほぼ途絶してしまふことになる。

こうした事情があるため、今日人民共和國における中共黨史研究（資料収集・編纂を含む）^③の歩みを語る場合には、改革・開放期における黨史研究組織再建後の動向を扱うことが普通である。すなわち、今日の中國において最も權威ある黨史研究機關の中共中央黨史研究室は、公式には一九八〇年に成立した中央黨史研究室と中央黨史資料徵集委員會を前身とし、また中共中央文獻研究室も一九八〇年の成立であると説明される。同様に、前述の『中共中央文件選集（一九二一）

一九四九」(二八冊本)も、「このように大量に、また系統だてて黨の歴史文獻を公開出版したのは、我が黨では初めてのことである」と評されたのである。しかしながら、それら黨史にかんする資料収集機關や事業がそれ以前になかったわけではない。

人民共和國における黨史研究、および黨史資料の収集・編纂事業は、一九五〇年代初めにさかのぼる。それを組織として擔つたのは、一九五一年一月に中共中央宣傳部のもとに設けられた「黨史資料室」であり、その刊行物が同年末ごろに創刊された雑誌『黨史資料』であった。『黨史資料』は一九五五年春の突然の終刊まで、計二四期が刊行され、當時収集された様々な黨史(革命史)関連の資料と研究成果を掲載している。

ただし、『黨史資料』は、この分野に關して建國初期に刊行されたほぼ唯一の雑誌であるにもかかわらず、當初の發行部数がごくわずかであったため、中國國內をふくめ、この雑誌を揃いで所有している大學・機關は、極めて少ない。また、内外の中共黨史研究者の多くにも、この雑誌や黨史資料室の詳細は、ほとんど知られていないと言つてよい。そこで本稿では、『黨史資料』の總目錄を提示しつつ、同誌に掲載されたいくつの文獻について、當時の『黨史資料』編輯部が掲載にあたつて、如何なる「編纂」を行つていたかを檢證する。そしてその編纂(改竄を含む)の過程や意圖を讀み取ることにより、中共黨史の研究が一九五〇年代にどのような資料狀況と政治的制約のもとで始まつたかを論ずる。

資料狀況が大きく改善されている今日の目から見れば、『黨史資料』に掲載された資料は、もはや珍貴なものではない。にもかかわらず、この「古雜誌」を取上げて取りあげるのは、一九七九年以降に黨史研究が再開されたのち、中央檔案館、中共中央黨史研究室などから發表された資料には、實は『黨史資料』から採られたものが少なくないからである。いわば、中共黨史研究出發時の時代的制約は、現在の黨史資料の編纂・發表に、それと意識されないうまま、引き繼がれてしまつていたのであり、その意味では、この『黨史資料』は「古雜誌」どころか、それ自體が今なお中共黨史研究の現狀を檢證する「黨史資料」の價值を持つているのである。

一 人民共和國成立前における黨史資料の収集・編纂

中共が自黨の歴史を振り返り、意識的、組織的に黨史關連の資料を収集しようとしたのは、一九二九年末にモスクワで設置された「中國黨史研究室」にさかのぼると考えられる。「中國黨史研究室」にかんしては、その主任の肩書きで「黨や革命闘争に参加した回想録」、「重要な會議に参加した時の回想録」などの募集呼びかけをした瞿秋白の「中國黨史研究室徵求回憶錄啓事」⁵⁾なる通知が残っているだけなので、同研究室が實體としてどのようなものであり、どれくらいの期間存続したのか、またどの程度の資料を集め得たのかはわからない。ただし、當時モスクワに滞在していた瞿秋白や張國燾といった中共幹部は、ちょうどこの年の末から翌一九三〇年にかけて、同地の中山大學（正式名稱は、中國勤勞者孫逸仙大學）や國際レーニン學校で中共黨史を講述し、その際、例えば瞿秋白はコミンテルン本部の中共關連の檔案を用いていたから、かれらはそうした中共黨史の講義の準備をする過程で、黨史資料の収集を組織的に行う必要性を感じたのではないかと推測することができる。

もつとも、中國國內にあつてこの「啓事」を目にすることのできた同志は、決して多くはなかつただろうから、その回想録募集の範囲はおのずからモスクワ在住の中共黨員に限定されたと見てよい。一九二九年末のモスクワといえは、當時モスクワにいた何叔衡が同じくモスクワにいた董必武に中共第一回大會の状況を問い合わせ、董がそれに返信をしていることが確認できる。⁸⁾ こうしたやりとりも、瞿秋白の回想録募集の呼びかけに關連したものではないかと考えることができるよう。

ちなみに、黨史研究にむけて、しかるべく回想録を収集することを訴えた瞿秋白は、一九三〇年の歸國後に黨の文書記録（檔案）を系統的に保管、整理することにも意を用いている。すなわち、瞿秋白は、中共における文書記録の組織的管理をはじめ規定した「文件處置辦法」（一九三二年四月制定）の起草者でもあつた。この「辦法」で瞿秋白は、黨の文書

を確實に保管することによって、「將來（我らが天下）の黨史委員會に引き渡す」⁽⁹⁾のがその目的であると述べている。中共の活動が苦境におかれていた當時にあっても、かれら黨員が、將來の勝利は歴史の必然であると考え、その時に書かれるであろう歴史のために、資料を残そうとしたある種の執念をうかがうことができよう。かれの起草した「辦法」にもとづき、中共の文書群はその後上海の地下専門部署（いわゆる「中央文庫」）に蓄積・保存された。中央文庫の文書群は、紆餘曲折を経た末、共產黨の「我らが天下」が實現した一九五〇年初めに、晴れて北京の中共中央のもとに運ばれることになる。⁽¹⁰⁾ただし、それは後の話であり、當時は國民黨が彈壓體制を敷く上海でも、またその彈壓を逃れた中共中央の移轉先（江西省の中央ソヴィエト區）でも、黨史關連の文書群が資料集として編まれることはなかった。⁽¹¹⁾

中共がその後、ある程度まとまって黨の歴史文獻を編纂・出版するようになるのは、いわゆる長征を経て、陝西省北部に據點を構えるようになってからである。現在、確認できる陝北での黨史資料編纂の最初の事例は、一九三七年夏に延安の解放社から活字印刷で出版された『中國問題指南』（「革命歴史叢書之一」第一、二冊、共に奥附なし）である。⁽¹²⁾第一冊は、一九二六―三一年に中國問題關連でコミンテルンが出した決議・指示を九篇収録したものの、第二冊は一九二二―三一年の中共中央の宣言や決議（六期中全會決議など）一三篇を収録したものだ。中央ソヴィエト區時代に蓄積された黨の文書群は、重要度の高いものを中心に、長征のさいにも帶同されたが、大移動途中に遺棄・散逸したものもあり、また移動先の陝北もそうした文書の再収集には不便な僻地であった。同書第二冊の「編者的話」が、中共第一回大會と第五回大會の文書は探したものの、得られなかったと述べているのは、そうした状況を反映している。

『中國問題指南』が如何なる體制・組織で編纂されたのかについては、手がかりに乏しいが、『指南』第二冊所収の中共文件がほぼすべて、當時毛澤東と並ぶ黨の指導者だった張聞天の執筆になる『中國現代革命運動史』（一九三八年刊）に引用されていることから見て、編纂の中心に張聞天がいたことはほぼ間違いない。⁽¹⁴⁾『中國問題指南』が収録したそれら歴史文書への編者の評價は、「當時の情勢のもとにあつては、完全に正しいものだった」（『中國問題指南』第一冊序言）とい

う全面肯定であった。これは當時の張聞天の立場でもある。

『中國問題指南』第一、二冊は、その後一九三八年二月に合訂され、解放社から『紅色文獻』として改めて刊行された。興味深いのは、まさにこの時期に、中共が刊行される黨指導者の著作や歴史資料の版本にかんして、一元的管理をはかる決定をしていることである。すなわち、同年二月に中共の機關誌『解放』に掲載された「啓事」は、二月八日以降、中共の公的文献、指導者の著作、および歴史材料などは、すべて延安の解放社など指定の出版機關に請託して印刷發行することとし、それまで様々な形で發行された書籍や冊子の内容については責任を負わないと聲明したのである。⁽¹⁵⁾ その意味では、解放社から合訂出版された『紅色文獻』こそは、中共による公的文献集の最初の事例だと考えられるのである。⁽¹⁶⁾ ただし、歴史文書収集への取り組みは、中共の機關紙誌に時折、○○文獻求むという廣告が載るように、⁽¹⁷⁾ その後も續いた模様だが、資料集の續刊、すなわち『中國問題指南』（革命歴史叢書）や『紅色文獻』の續編が刊行されることはなかった。

續編の編纂、刊行がなされなかった理由としては、むろん抗日戰爭の勃發といった外的要因を擧げることができようが、中共内部にも要因はあったと言わねばなるまい。すなわち、一九三八年以降、中共指導部の中では、『中國問題指南』（『紅色文獻』）に収録された文書を「完全に正しいものだった」と評價することへの異論、すなわち過去の路線の評價見直しを求める毛澤東らの聲が急速に大きくなっていったのである。かかる評價轉換を視野に入れつつ、黨史文獻の収集・編纂をやり直したのが、整風運動時期の毛澤東であった。すなわち、一九四一年から四三年にかけて延安では、整風運動と並行して黨の路線の歩みが總括され、その重要な一環として、毛澤東の陣頭指揮の下、改めて黨史資料の収集・編纂がなされたのである。新たに編纂された黨の文獻集が、毛のいう「黨書」、すなわち『六大以來』（一九四一年末刊）とそれに引き續いて編まれた『六大以前』（一九四二年一月刊）である⁽¹⁸⁾（その後、一九四三年に兩書を縮編した『兩條路線』が印刷された。ただし、それら文獻集は、いずれも公開發行されたのではなく、ごく限られた黨員向けの内部發行文書集であった）。

二種の黨の文獻集、とりわけ『六大以來』の編纂過程（毛自らが収録すべき文獻の閲讀・選別にあたった）とその大きな意

義（「黨書が出るや、多くの同志が武装解除され……ようやく皆が、十年内戦後期の（黨）中央の指導者の誤りが路線の誤りだったことを認めた」¹⁹）。すなわち、既往の黨の路線を左右の偏向・誤りの連続とし、毛澤東をそれらと對置する正しい路線の實踐者とする歴史認識の形成）については、毛を助けてその編纂にあたった胡喬木の回想をはじめ、すでにいくつかの研究がある²¹ので、詳述しない。ここでは、毛澤東の編纂にかかる新たな文獻集が、舊來の路線を「完全に正しいものだった」とする見地から編まれた『中國問題指南』や『紅色文獻』の續編ではあり得なかつたことだけを確認しておこう。

ただし、延安時期の組織的な黨史資料の収集に關しては、こうした路線の歴史的總括の過程の中で、一九四二年三月二七日に中央書記處の決定により、中共中央黨史資料編輯委員會（主任・康生、委員・彭眞、胡喬木、陶鑄、陳伯達、范文瀾、陸定一）が設立されたということには言及しておく必要がある²²。この委員會の設置される直前（三月一八日）に、「中級幹部の閲讀にふさわしい黨史文件選集」の編纂に向けて、胡喬木、陶鑄が資料の収集にあたる²³ことが決定されていることを考え合わせるならば、同委員會はのちの『六大以前』に相當する「中共黨史資料選錄」——この言葉は一九四二年三月二四日に、重慶にいる周恩來らに對して、毛澤東と任弼時が何件かの文獻の収集・送付を求めたさいに使った言葉²⁴——を編纂するために設けられたと言つてよいだろう。

中共黨史史上、はじめて「黨史資料編輯」を掲げて設置された同委員會（實務は胡喬木が擔當）は、延安では手に入らない「汪精衛・陳獨秀聯合宣言」（一九二七年）を取り寄せるなどの努力を重ねた末、一九四二年一〇月に『六大以前』の刊行にこぎ着けるわけだが、その刊行後も、引き續き黨の歴史文獻の収集・補充を繼續した模様である。例えば、延安では、五四運動の經過に關する胡喬木の文章や中共「一大」にかんする陳潭秋の回想（康生の一九四四年七月附按語あり——これについては後述）などを収録した資料集が、幹部の回覽のためにタイプ印刷されており、その一端をうかがうことができ²⁶る。ただし、そうして補充収集された資料の全貌や、それら資料が如何なる形態で折々に印刷されていたのかは、残念ながら不明である。また、そうした資料収集を擔つた組織である黨史資料編輯委員會が、いつまで存續していたかもよくわ

からない。

いずれにせよ、延安時期の中共黨史資料の収集と編纂は、黨の歴史の總括（路線の是非の検討）と表裏一體となったある種の政治活動であったため、一般に言う歴史資料の収集とは異質な特殊性（高度な政治性）を帯びていたことは留意されるべきである。上記の陳潭秋の回想ですら「黨内文件」という指定付きで印刷されていたことは、そうした黨史資料の特殊性を物語っている。

二 『黨史資料』の編輯・出版

雑誌『黨史資料』は、「中央の黨史資料収集に關する通知（一九五一年七月二日）」²⁷に基づいて中共中央宣傳部のもとに設置された「黨史資料室」の刊行した雑誌である。同通知によれば、黨史資料室は「黨史資料の研究、収集、保存を系統的に行うため」に設けられた部署で、その刊行物『黨史資料』は「黨史に關する各種資料、文件、文稿、回想、傳記、圖版などを収集・掲載し、若干部數を印刷して黨内の高級幹部の參考に供する。……黨の指導する革命軍隊、革命戰爭の歴史資料も、當面『黨史資料』に編入する」とされていた。黨の歴史資料全般のみならず、紅軍（人民解放軍）の資料も収集する權限を與えられていたのであつて、黨の會議録や個人檔案といったものを除くほとんどの歴史資料が、この黨史資料室の収集對象となつたわけである。この時期に黨史資料の収集が改めて掲げられたのは、人民共和國成立後間もなく中共創立三〇周年を迎え、その節目に刊行された胡喬木『中國共產黨的三十年』などにより、一種の黨史ブームが起き、黨としてもしかるべく資料収集を組織的に進める必要性が生まれたからだと推測することができる。

組織としての黨史資料室の設置は一九五一年一月一日、當初は中央宣傳部副部長の一人である徐特立が主任を兼任し、後に近代史研究の大家として知られることになる黎澍（一九二一—一九八八）が副主任であつた。²⁸ただし、實際の業務は、胡喬木（中央宣傳部副部長）の指示を仰ぎつつ、黎澍が擔當したはずで、一九五三年七月には黎澍が正式に主任に就任

している。⁽³³⁾このほか黨史資料室には、繆楚黃（一九三二—二〇〇〇）⁽³¹⁾、王眞（一九〇五—一九八九）⁽³²⁾、劉立凱（一九一六—一九九二）⁽³³⁾といった後の中國革命史、近代史研究の先達となる人物がおり、特に繆楚黃は『黨史資料』の編集にあたった。

黨史資料室の主任という職位について、黎澍の友人の中には、「隱居老人のやるような仕事じゃ、英雄も腕を振るう場所なしだ」と言う者もいたらしい。だが、「進んで中央宣傳部黨史資料室主任への轉任を願ひ出た」黎澍は、「ここは自分の歴史の新たな出發點だ。一九四七年秋に香港にいたころから、自分は主な關心を近代史の方面へと移してきた。今はまさに過渡期であつて、言ってみれば、暗かに陳倉に渡るつていうわけだ」と述べて、「このわりにのんびりした職務」を樂しみ、「資料の收集整理をするだけで、黨史の著述はしなかつた」という。⁽³⁴⁾

さて、當面不定期刊の黨内刊行物とされた『黨史資料』の創刊號が發行されたのは、一九五一年末ごろと推測される。「推測」と言わざるを得ないのは、同誌創刊號には發行期日に關する記述がなく、同號の「編集後記」の日附（一九五一年一〇月三〇日）、および第二輯（一九五二年二月）、三輯（同年八月）、四輯（同年十二月）の發行間隔から類推するよりほかないからである。⁽³⁵⁾この雑誌の書誌については、李海文氏（中共中央黨史研究室研究員）が次のように述べるのが、ほぼ唯一の情報である。

『黨史資料』は毎年四冊出された。この雑誌は當時、〔中共の〕中央委員、および中央各部の正副の部長、黨委員會、黨組織などの機關に送られ、印刷部數はわずかに八百部であつた。一九五三年には〔送付對象が〕地方の首長級幹部にまで擴大されたが、それでも印刷部數は二、三千部にとどまつた。雑誌は一九五一年末から五四年まで、合わせて二四輯、三三〇萬字が發行された。ただし、現在では見るのが難しく、とりわけセットの揃いを目にするのは困難である。わたしは、紆餘曲折の末、繆楚黃夫人の沈亦清さんのところから、何とかひと揃いを拜借した。⁽³⁶⁾

中共中央黨史研究室に勤務する李氏にして、わざわざ繆楚黃夫人から借りなければ揃いが見られないというのであるから、今やかなりの稀覯本になっていると行って良いだろう。また、當初の發行部數を李氏は八百とするが、筆者所藏の一九五二年第三・四輯の裏表紙には、「本刊限印五百本」の文字がある。いずれにせよ、毎期表紙の「内部參考 不得外傳」、あるいは「黨内刊物 不得外傳」の注意書きが示すように、限定された幹部にのみ閲覽可能な特殊な刊物だったことは間違いない、それゆえにその存在は中國國內の黨史研究者にも充分に知られているとは言い難い。⁽³⁷⁾ 參考までに、筆者の手元にある全二四期の目次を示せば、本稿附録のとおりである。

これら目次を一瞥すれば、當時のいわゆる「黨史資料」とは、どのようなものを指すのかを知ることができる。また、いくつかの収録資料については、出典についても説明があり、當時、どれくらいの資料が収集されていたのかを推し量ることができる。大まかに言えば、一九二〇～三〇年代に發行された内外（外國の場合は、モスクワで刊行された中國語刊物がやや目立つ）の刊行物から採録した資料がかなりの割合を占めており、新たに書き下ろされた回想録はそう多くない。新たに書き下ろされた回想録としては、一九五四年第六期に吳玉章の「第一次國內革命戰爭時期的歴史情況」が掲載されているが、これは同年三月一二日に黎澍が吳に對して、『黨史資料』に勤工儉學についての文章を書いてくれるよう要請したことに關連しているようである。また、黎澍が積極的に掲載を働きかけたものとしては、李銳「毛澤東同志的初期革命活動」（一九五三年第一～二期）⁽³⁸⁾ もあり、原稿集めは黎澍の個人的努力にかなり依存していたことがうかがわれる。

また、一九五三年第二期の王眞論文や同年第四期の繆楚黃論文のように、新たに収集された資料にもとづいて書かれた考證型の研究論文も含まれていることは注目される。資料の収集と編纂は、収集された資料の鑑別とも關わる作業であるから、それらの作業を通して、黨史の「研究」とまでは行かなくとも、史實の補正といったレベルの検討がなされたのであろう。そうした考證作業の成果の一部は、例えば、前述『中國共產黨的三十年』の改版のたびの内容修正に生かされている。⁽⁴⁰⁾ 他方、『黨史資料』で公表される資料は、單に黨史研究のために必要とされるものだけでなく、折々の「運動」の

參考資料となるよう選別されることもあった。例えば、一九五四年秋以降に學術界に胡適批判のキャンペーンが起こると、翌年第一期の『黨史資料』は、五四時期のいわゆる「問題と主義」論争から國民革命時期にかけての共產黨系人士による胡適批判の文章を集めて、一種の特集號としている。

今日の目から見れば、『黨史資料』全二四期を見渡しても、もはや目を引くような資料は多くない。むしろ、資料状況の劇的改善によって、『黨史資料』に掲載された資料の原文を見られ、比較できるようになった今日の状況では、『黨史資料』が如何なる「編纂」をしていたかの方が、はるかに興味深い。次章では、いくつかの具體的資料によってその「編纂」の過程と問題点を明らかにするが、それに先立ち、同誌が一九五五年四月に、何の豫告もなく停刊となった事情についてのみ、考察しておく。

『黨史資料』は、實體としては組織というよりも、黎澍、繆楚黃らの個人的努力によって資料の調査、収集をしていたと考えられるが、収集の範囲にはおのずから限界があった模様である。創刊後二年餘りを経て、一九五四年第三期に掲載された「中央宣傳部の現代革命歴史資料徵集に關する通知（一九五四年四月）」は、次のように苦衷を述べている。

一九五三年に『黨史資料』^マ月刊を出版して以來、中央宣傳部は人民出版社と協力して「中國現代史資料叢刊」を出版し、また併せて『新青年』『嚮導』『解放日報』等の重要な刊行物の復刻をはじめた。こうした活動は必要であるばかりでなく、擴充・強化していかねばならない。しかしながら、これまで中央宣傳部に集められた資料は、なお限られており、多くの書籍や報刊は不揃いのまま、あるいは収集されなままになっている。各方面から『黨史資料』⁽⁴⁾に寄せられる原稿も少なく、全く需要を滿たすものではない。

『黨史資料』はこの通知から一年後に、何の説明もなく突如停刊となり、恐らくはそれと同時に、中央宣傳部の「黨史

資料室」も廢止か、有名無實化してしまつたと見られる。⁽⁴²⁾それは何らかの政治的風波によるというよりも、歴史資料を含めた歴史的文献・檔案の収集という業務が、中央宣傳部の手を離れて、中央檔案館（中央辦公廳系列）に二元的に移管、集中されるようになったからではないかと考えられる。それをうかがわせるのが、『黨史資料』の停刊した一九五五年四月に、黨の中央辦公廳が出した「黨の歴史檔案を収集することに關する通知（一九五五年四月一〇日）」⁽⁴³⁾である。この通知は、中央辦公廳秘書局のもとに設けられる中央檔案館籌備處が今後、黨の歴史檔案を集中的に収集・管理することを謳うものだった。いわゆる歴史檔案と資料の境は曖昧であり、一口に資料と言つても、それが原件など稀少な價値を有する場合、歴史檔案に分類されることが多いのは、現在でも同じである。その意味では、一九五五年のこの通知は、黨の歴史資料（文件）も一種の歴史檔案と見なし、檔案の管理も資料の収集も檔案館に一元化するよう、業務の調整を圖つたものだと⁽⁴⁴⁾言えるだろう。

それが大枠で通知のとおり⁽⁴⁵⁾に實施されたことは、一年後の第二次全國檔案工作會議で、曾三（國家檔案局局長）が「革命歴史檔案の収集の問題については、國務院の決定により、革命歴史檔案はすべて中共中央檔案館の収集に歸することになった。……昨年四月に収集を開始し、現在いくらかの成果をあげている」と述べたこと⁽⁴⁶⁾によつて裏付けられよう。かくて、中央の文件など歴史檔案の整理・編纂は、中央檔案館（館の正式成立以前は中央辦公廳秘書局）系統に一本化され、まもなく『中共中央文件彙編』なる大型文献集（一九五六年に編纂開始、一九五八年初版、一九六五年増訂版、全二三七冊）とそれの縮約版である『中共中央文件選集』（全一二冊、館藏版）に歸結していくのである。ただし、兩者ともに中央檔案館内部でのみ使用されたため、その存在が世に知られることはなかった。本稿冒頭で觸れた『中共中央文件選集』（内部發行一四冊版、公開發行一八冊版）は、實はこの兩書を基礎として出來上がったものである。一方、雜誌としては、一九五八年六月に『黨史資料彙報』が中央辦公廳秘書局（のち中央檔案館）から内部發行で創刊され、従來『黨史資料』が擔つていた役割（折々に黨史にかんする資料を掲載して、高級幹部の參考に供する）は、この『黨史資料彙報』が代わつて引き繼いだよ

うである。⁽⁴⁷⁾

他方、黨史資料室の人員のうち、資料の収集・編纂に従事した歴史家について言えば、一九五五年の組織解體ののち、黎澍、繆楚黃、劉立凱らは、揃って黨の中央政治研究室なる組織に轉任した模様である。中央政治研究室とは、黨中央直屬のブレーン組織（主任・陳伯達、副主任・田家英）で、哲學組（組長關鋒）、經濟組（組長陳眞）、歴史組（組長黎澍）などの小部門に分かれており、「事實上は、直接に毛澤東に仕える學者グループ〔秀才班子〕」であつたと言われている。⁽⁴⁸⁾ いわば一九五五年以降、それまで黨史資料室が抱えていた二つの仕事は、文書資料の方が中央檔案館へ移管され、歴史（黨史）研究の方は、それを擔う人材ともども毛澤東著作（すなわち『毛澤東選集』）の編纂や注釋作成というイデオロギー工作の核心部に引き取られていったのだつた。かくて、いわゆる黨史研究は、一九五五年ののち、いったん外からは見えない黨の奥深い場所に移されることになつたのである。

三 『黨史資料』収録資料の改變問題

歴史資料の編纂、例えば原資料を復刻する場合、無斷でもとの文書に修正（削除、加筆）をほどこすことは、原則として規範をはずれる行爲と見なされる。そうした修正がやむを得ない場合も、それを記號なりで明示するのが資料編纂の通例というものである。こうした原則から見た場合、『黨史資料』の編纂方法は、多くの問題をはらんでいた。今日の規範からすれば、明確に改竄にあたる意圖的な改變處理がなされているのである。以下、二つの資料について、『黨史資料』の編集者が無斷で行つた改變を示し、その「改竄」の背景を検討しよう。

(一) 陳潭秋「回憶中國共產黨第一次全國代表大會」（第一期、一九五一年第一期）

『黨史資料』創刊號の卷頭に掲載されたこの文章は、一九二一年の中國共產黨第一回全國代表大會（以下、「一大」と略

稱)に出席した人物による回想、それも一九三六年に書かれたもので、史實に不明な點の多々ある「一大」に関する貴重な情報(會期や參會者數など)を含む第一級資料である。今日では、「一大」の開幕日は一九二一年七月二三日と判明しているが、それは後年に發見、確認されたロシア語資料の記載によるのであって、そうした物證がなかった當時においては、それら史實を確定するのに極めて重要な資料であった。

『黨史資料』は、この回想を掲載するにあたって、「一九三六年に書かれ、一九三六年七月刊行の『共產國際』に掲載された。今回本誌に掲載するに当たっては、「文章執筆」當時の政治情勢を述べた文章末尾の一部分を省略した」と出典を説明している。この説明は、基本的に間違いではない。『共產國際』とは、モスクワで刊行されたコミンテルンの機關誌(『共產主義インターナショナル』——獨、露、英、佛など各國語版あり)で、中文版(『共產國際』)の一九三六年第四・五合期(刊行は七月よりも遅いと推定される)には、當時同地に逗留していた陳潭秋の執筆にかかる「第一次代表大會的回憶」が掲載されているからである。ただし、上記の出典説明を普通に読めば、『黨史資料』の陳の回想は、この『共產國際』(中文版)を一部省略の上で轉載したもののよう理解されるが、實はそうではなかった。兩者は文體が大きく異なるのみならず、内容においても奇妙な食い違いが見られるからである。

『黨史資料』版の陳潭秋回想は、實は『共產國際』(中文版)から採録したのではなく、一九四〇年代半ばに延安で出されたと見られるタイプ印刷版をもとにしたものだった。そのタイプ印刷版の文體やそれに附された康生の按語から判断すると、それはどうやらモスクワで『共產主義インターナショナル』の他の言語の版あたりから中國語に翻譯されたもの⁽⁵²⁾のようである。すなわち、一九四〇年代半ばの延安では、また一九五一年の北京でも、『共產國際』(中文版)の當該號は手に入らなかつたと見えて、露語版(あるいは獨語版、英語版)から回譯した文章しか、傳存していなかつたわけである。しかし、問題は、原文か回譯かという文體の相違にとどまらない。内容の一部(大會會期、參加者數など)に、不自然な改變の跡が見られるのである。

具體的に言えば、『共產國際』（中文版）や延安タイプ版では、一大代表たちが上海に集まったのは、一九二一年の「七月下半月」で、大會は「七月底」に開催されたと書かれてあるのだが、『黨史資料』版では、その「七月下半月」が「六月的下半月」と改變され、大會は「七月初」に開催されたと書き換わっている。二箇所が符節を合わせたように書き換わっているのだから、これは、本来「七月末」の開催としか読みよのない資料を、強引に「七月初め」に大會が開かれたことを證明する資料に改變したとしか考えられない。また、一大參加者の數についても、『共產國際』（中文版）や延安タイプ版では、それぞれ「這次到會的一共有十三個人」、「參加的一共只有十一人」⁽⁵³⁾と書かれていたにも関わらず、『黨史資料』版ではこの一文が削除されている。

このような奇妙な處理がなされたのは、ひとえに當時の權威ある説に符合させるためであった。當時の權威ある説とは、具體的に言えば、直前に刊行された胡喬木『中國共產黨的三十年』（一九五一年刊）であり、同書は一大に關して、七月一日開幕、出席者十二人と明記していた。⁽⁵⁴⁾そして、實は同書の該當箇所は、より大きな權威に支えられていた。他でもない、毛澤東じきじきの見解である。『中國共產黨的三十年』の發表を直前に控えた胡喬木は、どうしても確定できない史實や評價の問題について、毛に直接指示を仰いでいたが、その一つが一大の參加者數であった。そのさい、「第一回代表大會の代表人數については、各説ではいずれも十三人ですが、ただ李達だけが十二人と言っており、その理由は包惠僧が代表ではないからというものです。この二説はどちらが正しいのでしょうか」という胡の問い合わせにたいして、毛はハッキリと「十二人である」と回答していたのである。⁽⁵⁵⁾當時の毛澤東が何を根據にこう答えたのか（李達の解釋に同意したのか、それとも独自の判斷なのか）、今となっては、もはや知るよしもない。⁽⁵⁶⁾だが、毛のこうした一言に淵源する『中國共產黨的三十年』の權威は、『黨史資料』の編集者をして、烈士・陳潭秋（陳は一九四三年に死去）の回想の字句を改變させるに十分なものだったのだろう。まこと、中共一大は純粹な歴史の問題ではなく、政治の問題でもあったのだった。

だが、『黨史資料』は決して一般讀者向けのものではなく、ごく一部の高級幹部・専門家向けに發行された内部期刊

だった。黨史研究が始まろうとする時に、そのような刊行物で、断りのない資料の改変がなされればどうなるか。もとの『共産國際』を見ることのできない専門家は、この資料を『中國共產黨的三十年』の公式見解を裏附けるものと考えたとだろう。さらに、當時存命だった一大参加者も、當然にその影響を受けたであろう。例えば、李達は同じく『黨史資料』の創刊號に中共結黨に關する回想を寄せているから、同じ號に載っている陳潭秋の回想を讀んだに違いない。その後李達は、文革で非業の死を遂げるまで、一貫して一大は七月一日開幕、出席者十二人とする回想録を書き續けることになるわけだが、それは改竄された資料の影響だった可能性が否定できないのである。その意味では、この「改竄」はその後の一大をめぐる黨史研究（關係者の回想）の混亂を引き起こす一因となったと言わざるを得ない。

(二) 施平「英勇的西征」（第一四期、一九五四年第三期）

中國共產黨の通説に合わせて、資料に無断で改変を加えるという事例は、中共一大と並ぶ黨史上の劃期である長征や遵義會議にかんしても見られる。長征については、一九五四年第一期から第三期にかけて、一九四二年に「黨内參考資料」として少数數が出版された回想録集『紅軍長征記』⁽⁵⁷⁾を再録することが行われた（再録時の題目は「中國工農紅軍第一方面軍長征記」）。そのさいに、革命的敘述（苦難の強調）にそぐわない五篇の回想録が削除されたということは、先ごろ亡くなった高華氏のすでに指摘するところであるが、實はそれに合わせて發表された施平「英勇的西征」（江西から四川に到る長征行を敘述した報告文）は、さらに大きな問題をはらむものであった。

施平「英勇的西征」を掲載するにあたって、『黨史資料』編輯部のつけた出典情報に「この文章は一九三五年に書かれ、雑誌『共産國際』に發表されたことがある」という極めて簡單なものであった。作者である「施平」についても、何の説明もなされていない。もつとも現在では、この文章は一九三五年一〇月に陳雲（同年六月ごろに四川で長征部隊を離れ、モスクワへ派遣された）がコミンテルンで行った報告をもとにして、施平の名義で發表したものだといことがわかつてい

また、確かに『共産國際』（中文版）の一九三六年第一・二合期には、施平「英勇的西征」が掲載されている。⁶⁰一九三五年末という早い時期に執筆された紅軍の長征にかんする報告文、それも共産黨（コミンテルン）側の公式刊行物に掲載されたものであるから、この文章の資料的價値は極めて高いと言つてよい。『黨史資料』版の文體は、『共産國際』（中文版）と同じであり、前出の陳潭秋回想（『共産國際』（中文版）からの轉載に非ず）とは違つて、『共産國際』一九三六年第一・二合期は『黨史資料』編輯部の手もとにあつたのであろう。

ただし、『黨史資料』版と『共産國際』版を比較すると、内容にはかなりの改變が加えられていることが判明する。改變内容は多岐にわたるが、概括すれば以下のような傾向性をもっている。①長征の作戦上の誤りにかんする部分や、陳獨秀、李立三、瞿秋白らの路線への批判の部分が大幅に削除されている。②行軍の苦難を強調し、他方で人民（少數民族）の協力が得られたように改變されている。③いくつかの事績について、毛澤東、任弼時、王震といった指導者の名が追加され、もともとあつた指導者の名前（例えば、賀龍、蕭克、陳昌浩ら）が削除されている。④長征の時期區分が、遵義占領・遵義會議を轉換點とするように改變され、遵義會議の意義が強調されている。①と②については、長征（あるいは紅軍・共産黨）の英雄的側面を強調し、マイナス面は描かないという方向の改變であると解釋することができよう。いわば、高華氏の指摘する「中國工農紅軍第一方面軍長征記」掲載時の改變と同じ方向性のものである。

これに對して、③は例えば、原文の「從一九三〇年起、我們黨就已開始用全力來解決這個最緊急最重要的任務（ソヴィエト根據地の建設）」が、「從一九二七年起、我們黨以毛澤東同志爲代表，就已開始用全力……」と改變されているような箇所である。すなわち、ソヴィエト根據地の建設という黨の最重要任務が一九三〇年から始まつたというのが當初の文章であつたのに、一九二七年の毛澤東による農村根據地（井崗山）建設が劃期であるかのように書き換えがなされているわけで、當時の認識を後世の歴史認識に合致するように改變したという性質のものである。これは、かなり高度な意圖性を持つものと考えなければなるまい。

その意圖性を極端に推し進めたものが④で、具體的には原文が「渡江後、即佔了遵義、同時佔了涪潭」である箇所を、「……同時佔了涪潭。在遵義、中國共產黨召開了具有偉大歷史意義的中央政治局擴大會議」とし、遵義會議の開催とその意義を付け加えたところである。遵義で會議が開催されたのは事實であるが、その劃期的意義（毛澤東による指導權の確立）が強調されるようになったのは、周知のように一九四〇年代以降、とりわけ一九四五年度の「若干の歴史問題に關する決議」以後のことである。一九三六年初めに發表された施平「英勇的西征」はそうした認識を持つてはいなかった。少なくとも、そうした認識を表明してはいなかった。⁽⁶⁾にもかかわらず、『黨史資料』の編集者は、當時の執筆者（施平）や黨があたかも「歴史決議」と同じ認識を、すでに持つていたかのごとくに加筆したわけである。同様の事例は、長征の成果を總括する部分において、原文の「特別是黨的領導長成起來了」が、「特別是遵義會議以後黨的正確領導樹立起來了」と改變された箇所にも見ることができるとは、ある意味で①や②よりも、はるかに高レベルの「改竄」事例だといふことができよう。

おわりに——『黨史資料』改變資料の後世への影響

一九五〇年代初めに始まった中共黨史研究は、改めて言うまでもなく、強い政治性を帯びたものであり、學術研究という今日の範疇や價值基準では論評できない、あるいはとらえきれない特殊性を持つていた。それは黨史資料の収集・編纂という一見實務的な作業においても同様であったと言つてよい。これに關連して、黎澍をよく知る陳鐵健氏は、一九五〇年代の黨史研究が持つていたそうした特殊性と黎澍の立場について、次のように述べている。

五〇年代の中ごろ、當時の中央宣傳部のある主要責任者の人が黎澍に、中共黨史の共同執筆を持ちかけてきたことがあった。黎澍はその黨史の執筆に同意しなかった。かれには、黨史研究における黨性の原則と科學の原則とが一致し

ないということがよく分かっていたので。党性が第一で、科學はその党性に従屬するほかなく、それぞれの時期に採擇される決議文に従屬するほかない。絶對的權威主義が奉じられ、指導者の言葉、さらには指導的發言者の言葉がそのまま絶對的眞理になつてしまふ雰圍氣の中では、如何なる人が黨史を編もうとも、指導者の言論に依據し、指導者の言葉を説明するのがせいぜいである。多くの確かな史料に依據し、獨立思考の研究活動を行うという基盤の上に、歴史の眞實に合致する黨史の著作を執筆することなど、できるはずはなかつた。黎澍は、中央宣傳部黨史資料室の主任というわりにのんびりした職務を自ら選び、資料の収集整理という仕事のみをし、黨史の著作の執筆はしなかつた。そして、讀書とおのれの學術的課題を研究する時間を持つた。それはまさに、歴史家としてのかれの聰明さであり、矜持⁶⁰であつた。

黎澍は資料の収集や整理のみにおのれの仕事を限定し、指導者の一言一句を奉じる（絶對權威主義）ことを餘儀なくされる黨史研究とは一線を劃した、それは歴史家としての「聰明さ」と「矜持」の表れであつたという評價である。だが、本稿で検討したように、「党性の原則と科學の原則とが一致しない」ことは、單に黨史研究において顯著であつただけでなく、實は資料の収集や整理にも及んでいたのであつた。前章で紹介した資料の改變が、黎澍のあずかり知らぬところで行われていたとは考えにくい。資料の収集や整理といった「わりにのんびりした職務」に専念すれば、そうした黨史研究の諸々のくびきから逃れられたという單純な話ではないのである。

後世の我々が、絶對權威主義の時代・環境で行われた黨史研究や資料編纂を笑うことはたやすいが、ほとんど意味のないことであり、本稿の眼目も、『黨史資料』編集責任者の黎澍や繆楚黃を批判することではない。では、なぜかれらの『黨史資料』編集を問題視するのか。それは、改革・開放政策の施行後に再開され今日に至る黨史研究や黨史資料の編纂事業において、それと知らぬまま、絶對權威主義時代に改竄された『黨史資料』の資料をそのまま再刊している例が、し

ばしば見受けられるからである。前章でとりあげた二つの改竄資料を例にして説明しよう。

中共「一大」にかんする陳潭秋の回想は、一九七九年以降、多くの資料集に収録されて今日に至っているが、實は筆者が二〇一一年に上海の中共一大會址紀念館に『共產國際』中文版のコピーを提供し、それが影印されるまで、實は中國國內では一度として同版がそのまま公表されることはなかった。實に、それが『共產國際』に發表されてから七十五年の間、この文章は常に回譯されたものか、編集によって改竄されたものだけが通行し、黨史研究者はそれに無自覺なまま「一大」にかんする考證研究を行ってきたのである。

陳潭秋回想の諸版については、すでに專論が發表されているので、ここでは詳述しないが、近年でも諸版の亂立した状況は改まってはいない。中でも憂うべきは、二〇一〇年に刊行された資料集『中共重大歴史事件親歴記（一九二—一九四九）』⁽⁶⁴⁾が、何と最も問題のある『黨史資料』版をそのまま収録していることである。つまり、中共「一大」の會期を「七月初」に改竄した版本が、何の説明もないまま、収録され、再刊されているのである。同資料集の編者によれば、かつて『黨史資料』などを編纂した黨史研究の先達（すなわち繆楚黃）の業績を確認する意味をこめて、この陳潭秋の回想録など九篇の文章をあえて『黨史資料』から轉載して収録したのだという。⁽⁶⁵⁾しかしながら、『黨史資料』掲載の版本がまともなものならまだしも、最も問題の多い版本をわざわざ再刊する意味をわたしは理解できない。先達の業績を確認することは大事なことではあるが、そのさいには、その先達が資料編纂をしていた時期の黨史研究が置かれていた厳しい環境やその環境のもとで發生した資料の改竄も合わせて明らかにせねばならないだろう。そうした作業を抜きにして、黨史研究の責任ある部署にいる者が、先達の編んだ資料を後生大事とばかりに、そのまま再刊するならば、それは先達の事績にたいして理解が缺けていることを示すばかりでなく、黨史研究のかつての混亂劇を再演することにつながるからである。

一方、施平「英勇的西征」は、陳潭秋回想と違い、改革・開放時期になってすぐに再公表されたり、資料集に收められたりするということにはならなかった。中國國內で施平「英勇的西征」があらためて公表されたのは、「長征勝利六十周

年」にあたる一九九六年のことで、掲載媒体は公開発行の權威ある雑誌『黨的文獻』（發行主體は中共中央文獻研究室と中央檔案館）の第五期であった。掲載にあたって、『黨的文獻』の編集部がつけた按語は次のようなものであった。

原文は一九三六年春にコミンテルンが發行した雑誌『共產國際』（中文版）の第一・二合期に掲載された。……紅軍の長征勝利六十周年を記念するため、本誌は中央檔案館の所藏文件（藏件）にもとづき、重要な史料的价值を持つこの文獻の全文を改めて發表する。我々は個別の文字や句讀點についてのみ校正を行ったが、文獻の原文はそのままである。

原文はコミンテルンの雑誌『共產國際』（中文版）に掲載されたとし、その卷號も示しているのに、わざわざ「中央檔案館の所藏文件」にもとづいて全文を公表するというのだから、この説明はやや奇妙である。そしてさらに奇妙なのは、「中央檔案館の所藏文件」にもとづく『黨的文獻』版と『共產國際』版が、微妙に食い違っていることである。そしてその最大の食い違いこそは、遵義占領を述べたくだりのあとに、「在遵義、中國共產黨召開了具有偉大歷史意義的中央政治局擴大會議」があるかどうかであった。すなわち、『共產國際』版には見られないこの一句が、やはり『黨的文獻』版にはついているのである。

では、同じくこの一句を含んでいた『黨史資料』版と『黨的文獻』版を比べるとどうか。本稿第三章（二）で指摘したような大幅な改變は『黨的文獻』版には見られない。つまり『黨的文獻』版は『共產國際』版にかなり近いのだが、『黨史資料』版と同様になっている點も散見する（例えば『共產國際』版の「蕭克の第六軍」の箇所が『黨的文獻』版では「任弼時、王震、蕭克の第六軍團」になっている點や、『共產國際』版にある少數民族の一部がなお紅軍に敵意を持っていたという部分が削除されている點など）。つまり、『黨史資料』版と『黨的文獻』版とは、ある程度の共通點を持つていることが確認できるのであ

る。かく見れば、中央檔案館の所蔵する「英勇的西征」なるものが、極めて素性のあやしい版本であることはあきらかだろう。一九九六年に『黨的文獻』が「英勇的西征」の独自の版本を掲載して以来、中國ではおびただしい数の長征にかんする資料集が出版されているが、それらに収録されている「英勇的西征」は、すべて『黨的文獻』版をもとにしており、残念ながら版本による違いに留意する資料集はひとつもない。

だが、かつて「英勇的西征」に遵義會議にかんする記述がないことを問題にした人物がいた。一九七〇年代に事實上の亡命先たるモスクワで、毛澤東批判のための中共黨史評論を執筆した王明である。「若干の歴史問題に關する決議」でその歴史的役割を否定されたかれは、遵義會議において毛澤東の指導権が確立したという中共の解釋が、あと知恵による「捏造された歴史」であることを批判し、そのさい陳雲の「英勇的西征」に遵義會議にかんするくだりがなく、これを證據として擧げていた。王明はいう。

その陳雲も、遵義占領後十二日間にわたった紅軍の休息については言及していても、遵義會議そのものとなると、行われた黨中央委員會政治局會議のことについては、當の論文〔「英勇的西征」〕の中で一語も觸れてはいない。……してみると陳雲には、遵義會議とその後の數年における毛澤東の政治路線の誤謬がわかりはじめていただけでなく、毛の軍事路線の破綻もつとにわかつていたのだ、としか思えない。だからこそ彼は、遵義會議については一言も觸れなかつたのである。⁶⁷

王明の毛澤東批判の手法に種々問題があることは争えないが、こと「英勇的西征」に遵義會議に關する記述がないことは間違ではない。「英勇的西征」に「在遵義、中國共產黨召開了具有偉大歷史意義的中央政治局擴大會議」の一文があるかどうかは、實はかなりの大問題であることがわかるだろう。當事者たる陳雲は生前、「英勇的西征」の執筆者（施平）

が自分ではないと主張したらしいが、それも「英勇的西征」が毛澤東憎しの王明によって大々的に引用された、いわば問題のある文獻であるため、陳雲がそれをばかって秘したという推定も成り立つ。〔「英勇的西征」は、それほど曰く付きの文章なのである。〕

だが、話はこれで終わりではない。王明の死後四半世紀以上を経て、中共中央文獻研究室の研究員が王明の書のこの段に對して、わざわざ反駁しているのである。二〇〇一年に書かれた陳群氏（『陳雲文選』の編集にも參加した人物）の論文である。陳氏はいう。

王明のウソは、反論するまでもなく破綻している。すなわち、王明が遵義會議について「一語も觸れてはいない」と言い張る「英勇的西征」を仔細に讀めば、その文章には「在遵義、中國共產黨召開了具有偉大歷史意義的中央政治局擴大會議」というくだりが、ちゃんと書いてあることがすぐにわかるのである。

つまり、遵義會議のことは「英勇的西征」にハッキリと書いてあるのに、王明はそれを無視して難癖をつけているというわけである。ということは、陳氏が據っている版本は、『黨的文獻』版（すなわち「中央檔案館の所藏文件」）なのである。では、陳氏は『共產國際』中文版の版本のことを知らないのかと言えば、實はそうではない。同じ文章の中で陳氏は、「つとに（一九）八〇年代初め、筆者は『陳雲文選』の編纂に參加したさい、『共產國際』（中文版）の一九三六年第一・二合期に「施平」署名の「英勇的西征」なる文章が發表されているのを發見した」とも言っているからである。つまり、かれは『共產國際』中文版に施平「英勇的西征」があるのを知っているながら、そして恐らくはその版本には遵義會議にかんする記述がないのを知っているながら、あえて別の版本——すなわち元をたどれば『黨史資料』に由来する「中央檔案館の所藏文件」——を根據にして、「英勇的西征」には、「在遵義、中國共產黨召開了具有偉大歷史意義的中央政治局擴

大會議」の一文があるのだと主張するのである。

今後、長征や遵義會議についての評価を論ずるさい、「英勇的西征」がどれほどの資料的価値を持つことになるのかはわからないが、一九五〇年代の『黨史資料』が置かれた特殊な時代的、政治的背景についての理解を缺くまま、素性の怪しい「中央檔案館の所蔵文件」の「英勇的西征」が流布すれば、混乱を生みこそすれ、正常な歴史研究が困難になることは必定である。されば、かりに研究対象が一九四九年以前の中共黨史の事象であっても、我々は黨史研究や黨史資料編纂の出発点となった一九五〇年代の状況を知ることなしには、一步も先に進むことはできないといえよう。一九五〇年代の黨史研究の状況を知ることが、いま改めて求められているのである。

註

- (1) 公刊の中央檔案館編『中共中央文件選集(一九二一〜一九四九)』(中共中央黨校出版社、一九八九〜一九九二年)は、それに先立って編纂された内部發行版の『中共中央文件選集』(中央檔案館編、中共中央黨校出版社、全一四冊、一九八二〜一九八七年)を基礎として補訂、擴充されたものである。また、二〇一一年には、公刊版『中共中央文件選集(一九二一〜一九四九)』を増補したものが、『建黨以來重要文獻選編(一九二一〜一九四九)』(中共中央文獻研究室・中央檔案館編、中央文獻出版社、全二六冊。収録文書のうち、一割ほどが新たに初めて公開されたもの)として出版されている。
- (2) 「如何研究中共黨史(一九四二年三月三〇日)」、中共中央文獻研究室編『毛澤東文集』第二卷、人民出版社、一九九三年、三九九頁。
- (3) 例えば、周一平『中共黨史學史』(甘肅人民出版社、二〇〇一年)では、第三章「社會主義探索時期中共黨史研究的曲折道路(一九四九・一〇〜一九七八・一二)」において、胡喬木『中國共產黨的三十年』、胡華『中國新民主主義革命史』などの個別著作については紹介がなされているが、黨史研究の組織・機關・期刊の状況については、ほとんど觸れるところがない。
- (4) 步心亭『中共中央文件選集』(公開本)評介『黨的文獻』一九九〇年第一期。
- (5) 舍維廖夫(K. B. Шевичев 中國名:石克強)提供「俄羅斯所藏瞿秋白未刊啓事」『百年潮』二〇〇三年第四期。同「啓事」は、「回想録の執筆を希望する同志は、一箇月

以内（一九三〇年一月三〇日まで）に中國黨史研究室に登録された」と述べていた。

(6) それぞれ、瞿秋白「中國共產黨歴史概論」（『瞿秋白文集（政治理論編）』第六卷、人民出版社、一九九六年、八七四～九二四頁）、舍維廖夫提供「張國燾關於中共成立前後情況的講稿」『百年潮』二〇〇二年第二期。

(7) 筆者がロシア國立社會政治史アルヒーフ（RGASPI）の所藏資料に關して行つた調査（二〇〇三年九月）によれば、瞿秋白の「中國共產黨歴史概論」が引用するかなりの資料は、同アルヒーフ所藏のフォンド五一四（中國共產黨關連）に對應する文書があることが確認された。その具體的事例については、拙稿「中國共產黨第二回大會について——黨史上の史實は如何に記述されてきたか」（『東洋史研究』第六三卷第一號、二〇〇四年）参照。

(8) 「董必武給何叔衡的信（一九二九年二月三一日）」、中央檔案館編『中國共產黨第一次代表大會檔案資料』人民出版社、一九八二年。

(9) 中央檔案館編『中共文書檔案工作文件選編（一九二二—一九四九）』檔案出版社、一九九一年、五〇頁。原文は「備交將來（我們天下）之黨史委員會」。

(10) 中央文庫をはじめとする中共の文書管理・保存体制の沿革については、費雲東・潘合定編『中共文書檔案工作簡史』（檔案出版社、一九八七年）が詳しい。

(11) ただし、ソ連ではコミンテルンの支援のもとで、中共黨史關連の資料集（中國語、ロシア語など）が一九三〇年代

にいくつか編纂、刊行されている。それら中國國外で編纂された資料集は、これまで中國の黨史研究では、全くと言つてよいほど見落とされてきた。これについては別稿を準備しているので、ここでは論じない。

(12) 二冊とも、書物自體にハッキリと出版期日を特定できるような書誌情報は附されていないが、第一冊の序言が一九三七年六月一五日の日附を持つていること、また第二冊の「編者的話」が中共創立十六周年にあつて發行すると述べていること、また解放社の發行する中共中央の機關誌『解放』が、一九三七年九月一三日發行の一卷一六期ではじめて兩冊の廣告を掲載していることから、一九三七年七月に二冊相次いで刊行されたと見られる。

(13) 『中國現代革命運動史』は當時、「中國現代史研究委員會編」として刊行されたが、實際に著述、編纂に當つたのは張聞天であることが確認されている（復刻版『中國現代革命運動史』（中國人民大學出版社、一九八七年）所收の莫文驊「中國現代革命運動史」的寫作經過）。

(14) 張は中央ソヴィエト區時期に執筆した「中國革命基本問題」（馬克思共產主義學校、一九三四年一月〔中央檔案館編『中共黨史報告選編』中共中央黨校出版社、一九八二年所收〕——『中國現代革命運動史』の初稿に相當）でも、のちに『指南』第二冊に收録されることになる資料を引用している。また、張は一九三七年六月二〇日に、それまでの黨の路線を振り返る「關於十年來的中國共產黨」を執筆して『解放』一卷八期（一九三七年六月二八日）に發表し、

さらに翌年にも「中國共產黨十七周年紀念」(『解放』第四三・四四期、一九三八年七月)を執筆するなど、當時の黨史の第一人者であった。

(15) 「中國共產黨中央委員會啓事」『解放』第三二期、一九三八年二月二五日。

(16) 同じ黨史關係の資料でも、一九三六年夏に始まった長征參加者の回想録編纂事業が、各種稀覯本(版本)の復刻を含めて、近年注目を集めている(後掲註(66)参照)のに對し、『中國問題指南』『紅色文獻』の存在は、中國國內でもほとんど知られぬまま、今日に至っている。なお、明確に中共の發行にかかるものと斷定できないが、一九三八年初めに『十年來の中國共產黨』というタイトルの中共關連資料集が各地で發行されている(平凡編輯『十年來の中國共產黨』上海南華出版社、一九三八年一月・洛甫等著『十年來の中國共產黨』解放出版社、一九三八年一月など)。ただし、版本によって収録されている文獻には異同がある。

(17) 「解放社爲徵集中共歷史文獻啓事」(『解放』第四三・四四期、一九三八年七月)、「徵求文獻啓事」(『解放日報』一九四一年五月二九、三〇日)がその一例である。例えば、後者(中央秘書處の啓事)は、一九三〇年秋の中共六期三中全會の決議案と一九三一年の中央ソ區黨代表大會の決議案を求むという内容で、提供者には解放社の出版物五點を呈呈するとある。

(18) 『六大以前』『六大以來』とともに、黨中央の名義で出された文件(決議、指示、宣言など)だけでなく、機關誌な

どに載った黨幹部の論文も収録している。ただし、黨史にかかわって事後に執筆された回想録などは収録されていない。

(19) 一九四三年一〇月の中共中央政治局會議での毛澤東の發言(中共中央文獻研究室編『毛澤東思想年編』中央文獻出版社、二〇一一年、三六〇～三六一頁)。ちなみに、「十年内戰後期」とは、極左的傾向が黨中央を支配したとされる一九三二年末から一九三四年末までを指す。

(20) 『胡喬木回憶毛澤東(增訂本)』人民出版社、二〇〇三年、一七四～一八六頁。

(21) 主要なものとして、逢先知「關於黨的文獻編輯工作的幾個問題」『文獻和研究』一九八七年第三期、裴淑英「關於『六大以來』一書的若干情況」『黨的文獻』一九八九年第一期、關志鋼「『六大以前』、『六大以來』與中共黨史研究」『黨的文獻』一九九〇年第三期、何方『黨史筆記』利文出版、二〇〇五年、六三三～六四一頁。

(22) 中共中央組織部・中共中央黨史研究室・中央檔案館編『中國共產黨組織史資料(一九二一～一九九七)』第三卷上、中共黨史出版社、二〇〇〇年、五四～五五頁、『彭真年譜(一九〇二～一九九七)』上卷、中央文獻出版社、二〇〇二年、二〇〇頁。『彭真年譜』によれば、この日の中央書記處工作會議では、『六大以來』の通讀が一通り終わったのを受けて、中央高級學習組で次週から中共黨史と中國革命史の研究を開始することが決定されている。ちなみに、その中共黨史研究のさいに毛澤東が行った報告(一九四二年

三月三〇日)こそが、本稿冒頭で觸れた「如何研究中共黨史」である。

- (23) 中共中央文獻研究室編『任弼時年譜(一九〇四—一九五〇)』中央文獻出版社、二〇〇四年、四二一頁、中共中央文獻研究室編『毛澤東年譜(一八九三—一九四九)』中卷、人民出版社・中央文獻出版社、一九九三年、三六九頁。

- (24) 前掲『任弼時年譜(一九〇四—一九五〇)』四二二頁。當時、毛と任が取り寄せを求めた文獻は、『汪精衛・陳獨秀聯合宣言』、彭述之「中國革命的根本問題」、瞿秋白「中國革命中之爭論問題」、「中共第五回大會決議」だった。

- (25) 中央文庫の文書の一部も、一九四二年から四三年にかけて、『六大以前』編纂のために延安に運ばれていた(潘合定「上海「中央文庫」和延安中央檔案轉移的情況」『黨的文獻』一九九〇年第一期、董永昌主編『上海檔案志』上海社會科學院出版社、一九九九年、一三九頁)。前注で挙げた文獻四點のうち、『六大以前』の刊行までに入手できたのは、『汪精衛・陳獨秀聯合宣言』だけで、残り三點は入手できず、同書が一九五一年に中央辦公廳から再版されたさいに補充されたという(前掲『胡喬木回憶毛澤東(增訂本)』一八三頁)。

- (26) 中共一大會址紀念館所藏。同館所藏のものは、二一—二四だけの頁数を持つ断片稿で、二二頁には喬木「五四」運動經過(『解放』週刊第七〇期(一九三九年五月))に掲載された胡喬木「青年要發揚五四愛國精神」が、二二—二四頁には陳潭秋「中共第一次大會的回憶」が印刷されて

おり、後者についてはその寫眞版も公表されている(『上海革命史資料與研究』第一輯、上海古籍出版社、二〇〇一年、六七—六七三頁)。この断片稿が二一—二四の頁数を持つということは、その前後のページにも資料が収録されていたということ、ひいてはそれが全體としてある種の黨史資料集(回想録集)だったのではないかということ推測させる。

- (27) 『中國共產黨宣傳工作文獻選編』第三卷、學習出版社、一九九六年、二五八—二五九頁。

- (28) 前掲『中國共產黨組織史資料(一九二一—一九九七)』第五卷、六二—六三頁。

- (29) 李海文「中國共產黨歷史研究的過去與現狀」『北京黨史』二〇一〇年第四期。なお、黎澍は一九三六年に中共に入黨、一九四九年以前は主に國民黨支配地域でジャーナリズムの仕事に従事していた。歴史學に重點を移していくのは、一九四〇年代後半に『辛亥革命與袁世凱』(一九四八年刊)を執筆するようになってからである。また、繆青(繆楚黃の子息)「毛澤東「反對本本主義」一文の發現經過」(黨的文獻)一九九三年第三期)によれば、黨史資料室の副主任は當初数名いたようで、第一副主任が田家英、常務副主任が黎澍であったという。

- (30) 「黎澍先生編年」、徐宗勉・黃春生編『黎澍集外集』社會科學文獻出版社、二〇〇三年、二九六—二九七頁。

- (31) 略傳に、繆青「繆楚黃」(『北京黨史』一九九六年第四期)がある。

- (32) 略傳に、王檉林「王眞先生與中國現代史的教學和研究」『史學史研究』一九九二年第三期がある。王眞は一九五三年上半期に北京師範大學（政教系）に轉任、のち『中國新民主主義革命時期通史』の編纂にも參劃したが、かつて一九三〇年代初めに釋放されるために書いた反共文章のあることが一九五八年に發覺し、一九五九年に右派と認定され、黨籍剝奪、教研室主任を追われたという（『流逝の歲月——李新回憶錄』山西人民出版社、二〇〇八年、三五四頁）。
- (33) 劉立凱は山東省威海の人。一九三四年に入黨、山東省各地で教師を務めたのち、一九四八年に徐特立の秘書となり、一九五一年より中宣部黨史資料室、中央政治研究室、馬列主義研究院などに勤務した。文革をはさんで中共中央辦公廳圖書館、中共中央書記處研究室などに勤務し、一九八二年に退職。主著に、『一九一九至一九二七年的中國工人運動』（工人出版社、一九五三年）など。
- (34) 張生力「黎澍之路（續二）」『史學理論研究』一九九七年第一期、陳鐵健「黎澍先生十年祭」、黎澍紀念文集編輯組編『黎澍十年祭』中國社會科學出版社、一九九八年、二七四頁。
- (35) ただし、筆者の手にある創刊號には「公元一九五二年一月二四日收到」というスタンプがおされているので、實際の發刊が一九五二年にずれ込んだということはあり得る。
- (36) 李海文「後記」『中國工農紅軍長征親歷記』人民出版社、二〇一〇年、五一四～五一五頁。
- (37) 中國の黨史専門家でも、しばしば『黨史資料』を全二〇期とする誤解がある（周一平『中共黨史研究七十年』湖南出版社、一九九一年、二二二頁、同『中共黨史學史』甘肅人民出版社、二〇〇一年、一二〇頁、李永璞主編『中國史志類內部書刊名錄（一九四九～一九八八）』山東人民出版社、一九八九年、一頁）。
- (38) 「黎澍關於留法勤工儉學會的發起和二批學生達到法國經過致吳玉章信」『吳玉章往來書信集』重慶大學出版社、一九九三年、二二四頁。
- (39) 掲載までの詳しい経緯については、李銳「黎澍十年祭」〔前掲「黎澍十年祭」所收 參照。なお、李銳「毛澤東同志的初期革命活動」は、一九五三年から翌年にかけて公開發行の雑誌『中國青年』にも連載された（その後一九五七年に中國青年出版社から同タイトルで單行本出版）。李銳はこれについて、「一九五三年に『中國青年』に連載する前に、中宣部が創刊したばかりの『黨史資料』一、二期に全文掲載された」と述べているが、『黨史資料』に掲載されたのは、『中國青年』掲載版でいえば、4から後の部分である。ただし、それぞれの章節の内容や資料は、『黨史資料』版の方が詳しく、例えば、留佛勤工儉學運動への李石曾の關與が、『黨史資料』版の方では言及されているのに、『中國青年』掲載版では削除されていたりする。公開にさいして、毛澤東の公式イメージを損なうような部分が慎重に削られたことが知れる。
- (40) その具體的狀況（中共二大の史實）については、前掲拙

稿「中國共產黨第二回大會について」参照。なお、こうした研究成果は、劉立凱・王眞『一九一九至一九二七年的中國工人運動』（工人出版社、一九五三年）、繆楚黃『中國共產黨簡要歷史』（學習雜誌社、一九五六年）のような形で公刊される場合もあった。

(41) 全文は、前掲『中國共產黨宣傳工作文獻選編』第三卷、七四四頁に見える（日附は一九五四年四月七日）。ちなみに「中國現代史資料叢刊」としては、鄧中夏『中國職工運動簡史』（復刻版）、第一次國內革命戰爭時期的農民運動』（資料集）などが、一九五三～一九五四年に人民出版社から刊行されている。

(42) 前掲繆青「毛澤東「反對本本主義」一文の發現經過」によれば、黨史資料室は一九五五年に「解散」したという。

(43) 中國人民大學檔案系編印『檔案工作文件和論文選編』第一集、一九七九年、一二八～一二九頁。

(44) 革命歴史に關する資料の中でも「文物」に該當するものは、北京の中國革命博物館（籌備處）がその収集にあつたようである（劉建美「六十多年來中國國家博物館近現代基本陳列的演變」『中共黨史研究』二〇〇二年第八期）。

(45) 曾三「在黨的第二次全國檔案工作會議的總結（一九五六年四月二日）」『曾三檔案工作文集』檔案出版社、一九九〇年、五一頁。

(46) 『中共中央文件彙編』は未公開本扱いのまま今日に至っており、同書を目にすることは外部者には不可能である。同書と『中共中央文件選集』（館藏本版）に關する斷片的

記述は、裴桐「我從事檔案工作的體會」（中央檔案館叢刊）一九八六年第二期、王明哲「近十年中央檔案館編輯出版檔案史料的情況」（黨的文獻）一九八九年第五期、謝瑩「繼往開來 走向新征程——中央檔案館編輯研究工作回顧與展望」（檔案學研究）二〇〇〇年第一期）に見える。

(47) 『黨史資料彙報』については、註(46)の諸論文参照。創刊直後の數期には、當時ソ連から返還されたばかりの「コミンテルン駐在中共代表團アルヒーフ（中共駐共產國際代表團檔案）」から、結黨前後の文獻が掲載された。前掲謝瑩「繼往開來 走向新征程」によれば、『黨史資料彙報』は高級幹部向けに現實政治に關係する歴史資料を提供する使命を帯びていたといい、一九八一年の整黨運動のさいには陳雲の中共七大での發言を、また翌年には「真理標準問題論争」に關連して毛澤東の親筆「社會實踐是檢驗真理的唯一標準」を掲載したという。二〇〇〇年時點までに九八期が発行されたというが、筆者は同誌の現物を目撃できておらず、その後發行が繼續されているかどうかもわからない。

(48) 于光遠「我和黎澍幾個時期的交往」（前掲『黎澍十年祭』一九頁）、冷銓清「我所知道的中央政治研究室」（『黨史博覽』二〇〇九年第五期）、耿化敏「改革開放前中共中央編寫黨史教科書的設想」（『中共黨史研究』二〇一四年第二期）。

(49) 中共一大の會期をめぐる史實の考證については、拙著『中國共產黨成立史』（岩波書店、二〇〇一年）二九〇～二

九五頁を参照。

(50) 註(26)参照。

(51) 按語は以下の通り。「最近曹軌歐同志從莫斯科帶回的書籍中、找出一篇陳潭秋同志的文章——中共第一次大會的回憶。這篇文章、是一九三六年六、七月間潭秋同志在莫斯科爲紀念黨的十五周年紀念而寫的、我記得在『共產國際』雜誌上曾登過。此文對黨的第一次大會供給了許多歷史材料、特抄出送各同志一閱。康生一九四四年七月」。

(52) 陳潭秋の回想は『共產主義インターナショナル』の露語版、獨語版、英語版にも掲載されている(同内容。恐らく、『共產國際』[中文版]をもとに翻譯したものだろ)ほか、モスクワで刊行された露語雜誌『民族・植民地問題』(Национально-колониальные проблемы)の一九三七年第一期(通卷第三八期)にも再掲されている。

(53) 『共產主義インターナショナル』の露語版、獨語版、英語版ともにこの箇所は「十三人」であるのに、なぜ延安タイプ版が「十一人」になっているかは不明である。

(54) 中共一大の開會日が七月一日とされた経緯については、拙稿「思い出せない日附——中國共產黨の記念日」(小關隆編『記念日の創造』人文書院、二〇〇七年)参照。

(55) 「在胡喬木關於『中國共產黨的三十年』一文中幾處提法的請示信上的批語(一九五一年六月二日)」「建國以來毛澤東文稿」第二冊、中央文獻出版社、一九八八年、三六七頁。

(56) これより先、毛澤東は一九四五年の中共第七回大會の直

前にも、「一大」を振り返って、その代表を「十二人」と述べていた(「中國共產黨第七次全國代表大會的工作方針(一九四五年四月二一日)」「毛澤東文集」第三卷、人民出版社、一九九六年、二九二頁)。

(57) ハーバード・イェンチン圖書館所藏の『紅軍長征記』(一九四二年刊本、朱德よりエドガー・スノウに寄贈されたもの)が、二〇〇六年に廣西師範大學出版社から影印再刊された。

(58) 高華「紅軍長征的歷史敘述是怎样形成的?」「炎黃春秋」二〇〇六年第一〇期(のち、高華『革命年代』(廣東人民出版社、二〇一〇年)に収録)。

(59) コミュンテルンでの報告全文(漢譯)は、『黨的文獻』二〇〇一年第四期に「在共產國際執行委員會書記處會議上關於紅軍長征和邊義會議情況的報告(一九三五年一〇月一日)」として收められている。『共產國際』への掲載経緯については『ВКП(б), Коминтерн и советского движения в Китае: 1931-1937, Москва, 2003 (漢譯: 中共中央黨史研究室第一研究部譯『聯共(布)、共產國際與中國蘇維埃運動(一九三一—一九三七)』中共黨史出版社、二〇〇七年)の第三三九文件の注釋参照。

(60) 『共產主義インターナショナル』露語版(一九三五年一月)、獨語版(一九三六年一月)、英語版(同二月)にも掲載されているほか、ソ連共產黨中央の機關誌『ボリシェヴィキ』(Большевик)にも掲載されている(第二二號、一九三五年一月)。

『黨史資料』總目錄

第一輯【總第一期】（一九五一年年末？）共二五七頁

《中央關於收集黨史資料的通知（一九五一年七月）》

- (61) ただし、陳雲がコミンテルン幹部會で行った報告では、遵義で開催された擴大政治局會議で、それまでの軍事指導者の誤りが批判された結果、「我々は「鉛筆で指揮を執る戰略家」を解任して、毛澤東同志が指導にあたるよう推舉した」ことが言及されている。前掲「在共產國際執行委員會書記處會議上關於紅軍長征和遵義會議情況的報告（一九三五年一月一日）」。
- (62) 前掲陳鐵健「黎澍先生十年祭」（『黎澍十年祭』二七四頁）。ちなみに、文中に言う「中央宣傳部のある主要責任者の人」とは、胡喬木を指すのではないかと見られる。
- (63) 拙稿「由考證學走向史料學——從中共「一大」幾份資料談起」（『中國浦東幹部學院學報』二〇一一年第五期、徐雲根・信洪林・張玉菡「陳潭秋「中共第一次大會的回憶」版本考述」『上海革命史資料與研究』第一輯、上海古籍出版社、二〇一一年。
- (64) 李海文編『中共重大歷史事件親歷記（一九二一—一九四九）』四川人民出版社・人民出版社、二〇一〇年。同書は二〇〇五年に刊行された同名書を「人民・聯盟文庫」の一冊として再刊したものである。
- (65) 前掲李海文編『中共重大歷史事件親歷記（一九二一—一九四九）』四一二頁。
- (66) その主なものは以下の通り。劉統編『親歷長征——來自紅軍長征者的原始記錄』中央文獻出版社、二〇〇六年、陳宇編『誰最早口述長征』解放軍出版社、二〇〇六年、董必武・陸定一・舒同等著『紅軍長征記』解放軍文藝出版社、二〇〇七年。
- (67) Ван Мин, *Полетко КПК и предательство Мао Цзюна*. Москва: Изд-во полигр. лит-ры, 1975, стр. 29-30. 邦譯：高田爾郎・淺野雄三譯『王明回想錄——中國共產黨と毛澤東』經濟往來社、一九七六年、三九、四二頁）。ちなみに、王明は「英勇的西征」を引用するにあたって、『共產國際』中文版に依據している。
- (68) 朱佳木「聽陳雲同志談黨史」（『中共黨史研究』二〇〇五年第四期。
- (69) 周一平『英勇的西征』作者究竟是誰」（『探索與爭鳴』二〇一二年第八期）は、「施平」を陳雲の別名に違いないとした上で、陳がそれを否認した理由について、そう推定している。
- (70) 陳群「關於陳雲向共產國際報告紅軍長征和遵義會議的情況」（『黨的文獻』二〇〇一年第四期。

陳潭秋《回憶中國共產黨第一次全國代表大會》

李達《中國共產黨成立時的回憶》

吳玉章《關於第一次國內革命戰爭時期的片段回憶》

郭沫若《「四一二」前夜的蔣介石》

《「四一二」大屠殺紀實》

李光《記中國工農紅軍第一方面軍的創立》

劉型《秋收起義前後的片斷回憶》

《在井岡山上》

龍躍、江天輝、黃知真、繆敏《閩浙贛根據地的革命鬥爭》

葉劍英《中共抗戰一般情況的介紹》

《編後記（一九五一年一〇月三〇日）》

《「黨史資料」徵稿及發行簡則》

第二輯【總第二期】（一九五二年二月）共二八一頁

瞿景白《一九二七年的中國職工運動》

楊立三《南昌起義時的警衛團》

張《南昌起義的片斷回憶》

何長工《井岡山的鬥爭與中國工農紅軍的創造》

周文《堅持二十年的游擊戰爭的贛粵邊》

《抗日戰爭時期敵後解放區概況》

《編後記（一九五二年二月一〇日）》

第三輯【總第三期】（一九五二年八月）共三〇五頁

秋白《中國職工運動的問題》

文虎《一九二八年至一九三〇年中國職工運動狀況》

葉蠖生《中國蘇維埃運動史稿》

典琦《一九三〇年初全國蘇維埃區域總形勢》

紅旗社《一九三〇年春全國紅軍概況》

李光《中國工農紅軍的生活狀況》

《編後記（一九五二年八月二日）》

第四輯【總第四期】（一九五二年二月）共一九五頁

瞿秋白《中國革命與共產黨》

秋白《中國的取消主義和機會主義》

思美《評「中國左派共產主義反對派政綱」》

蔡和森《論陳獨秀主義》

附錄·陳獨秀《中國國民革命與社會各階級》

《編後記（一九五二年二月）》

一九五三年第一期【總第五期】

（一九五三年六月一日）共一四七頁

《中央宣傳部關於「黨史資料」擴大發行應注意事項的通知（一九五三年五月）》

李銳《毛澤東同志的初期革命活動（上）》

廖煥星《武昌利群書社始末》

廖煥星《中國共產黨旅歐總支部》

楊之華《一個共產黨人——瞿秋白》

中央人民政府南方老根據地訪問團鄂豫皖分團資料組《鄂豫皖根

據地的革命鬥爭》

中央人民政府南方老根據地訪問團川陝分團《川陝邊革命根據地

史略》

《簡訊》、《編後記》一九五三年四月

一九五三年第二期【總第六期】

(一九五三年七月一日) 共一六八頁

李銳《毛澤東同志的初期革命活動(下)》

袁福清《回憶毛澤東同志領導下的湖南初期工人運動》

王真《關於中國共產黨第二次全國代表大會的會期會址問題》

中國人民解放軍軍事學院戰史教授會編《第二次國內革命戰爭史

講義初稿(一九二七年—一九三七年)》

林《一九三一年一月至一九三三年十月中國工農紅軍戰績統計》

一九五三年第三期【總第七期】(一九五三年八月) 共二〇八頁

彭江流《「安源路礦工人俱樂部」的歷史》

曾廣瀾《回憶蔡升熙烈士》

中國人民解放軍軍事學院戰史教授會編《抗日戰爭時期中國人民

解放軍戰史講義初稿(一九三七年—一九四五年)》

穆欣《抗日戰爭時期的晉綏解放區》

繆楚黃《堅持蘇南蘇中抗日戰爭的新四軍第一師》

《信箱》

一九五三年第四期【總第八期】(一九五三年九月) 共一五六頁

《傳記(一)——陳雲、高崗、彭德懷、董必武》

鄧中夏《中國無產階級的力量》

楊銓《一八六二年至一九二二年之中國工業》

繆楚黃《遠東各國共產黨及民族革命團體第一次代表大會》

《一九二七年海陸豐的革命運動》

《抗日戰爭時期國民黨反動派反共反人民的一部分文件》

一九五三年第五期【總第九期】

(一九五三年一〇月) 共一四八頁

《傳記(二)——林伯渠、彭真、鄧小平、劉伯承》

董純才編著，李卓然校閱《陝甘寧邊區簡史》

林田編《一九二〇年至一九二七年的中國共產主義青年團》

劉光《中國共產主義青年團的產生發展及其轉變》

新華社《五四運動以來中國主要的革命青年團體介紹》

《簡訊》「人民出版社決定影印「嚮導」「解放日報」等十種革命

報刊」

一九五三年第六期【總第一〇期】

(一九五三年一月) 共一六二頁

《中央宣傳部辦公室關於一九五四年「黨史資料」第一期至第十

期發行辦法的通知(一九五三年一〇月)》

《傳記(三)——饒漱石、陳毅、林彪、賀龍、徐向前》

繆楚黃《第二次國內革命戰爭初期的政治狀況和黨內兩條政治路

線的鬥爭——學習「中國的紅色政權為什麼能夠存在？」、

「井崗山的鬥爭」和「星星之火，可以燎原」的筆記》

張宗仁《中國共產黨成立以前中國產業工人人數的初步統計》

北京工人週刊社《二七運動紀實》

項英《一九二八年的中國工人運動》

劉弄潮《關於「毛澤東同志的初期革命活動」一文的兩個小問題》

于佩秋《介紹人民出版社影印的十種革命報刊》

一九五三年第七期【總第一期】

(一九五三年二月) 共一五三頁

《傳記(四)——鄧子恢、葉劍英、李富春、羅榮桓》

葛薩廖夫著，張誠譯，徐永瑛、趙一鶴校《中國共產黨的初期革命活動》

李之龍《三二〇反革命政變真相》

上海工人運動史料委員會編《四一二反革命政變的前前後後》

李木菴《西安事變紀實》

《補正》、「黨史資料」一九五三年第一期至第七期篇目索引

一九五四年第一期【總第二期】

(一九五四年二月) 共一三四頁

《傳記——毛澤東、劉少奇、周恩來、朱德》

《中國工農紅軍第一方面軍長征記(上)》

《重印序言(一九五四年一月)》、《原出版者的說明(一九四二年一月二〇日)》、《原編者關於編輯經過的說明(一九三七年二月二二日)》、《毛澤東同志長征詩》、《毛澤東同志

長征詞》、必武《出發前》、富春《暫別了，江西根據地的弟兄！》、小朋《離開老家的一天》、彭加倫《別》、艾平《第

六個夜晚》、彭加倫《追》、富春《夜行軍》、小朋《夜行軍

的一幕》、張雲逸《聶都游擊隊的記述》、小朋《泥菩薩》、

加倫《大王山上行路難》、艾平《佔領古陂圩》、斯頓《沒有到敵人呀！》、艾平《彭軍團長砲攻大來圩》、斯頓《佔領宜章城》、加倫《幹事去！》、小朋《粵漢路旁》、耿飈《由臨武至道州》、艾平《休矣飛機！》、艾平《從兩河口到馬蹄街》、艾平《燒死了兩匹馬》、加倫《道州城的一瞥》、彭加倫《苗人的神話》、李雪山《緊急渡湘水》、莫文驊《在重圍中》、譚政《最後的一道封鎖線》、郭滴人《廣西僑民》、定一《老山界》、陳明《放火者》、艾平《手榴彈打坍了一營敵人》、劉亞樓《渡烏江》、艾平《紅四師強渡烏江的故事》、張山震《甕安之役》

一九五四年第二期【總第三期】

(一九五四年三月) 共一七二頁

《中國工農紅軍第一方面軍長征記(中)》

譚政《向赤水前進》、加倫《病員的話》、雪楓《婁山關前後》、艾平《第二次佔領遵義城》、舒同《遵義追擊》、翰文

《擴大紅軍》、曙霞《小茅屋》、小朋《殘酷的轟炸》、熊伯濤

《茅台酒》、陳士渠《倒流水四個連控制敵人三個師》、蕭華

《南渡烏江》、陳士渠《奪取定番城》、艾平《五顆子彈消滅

了一連敵人》、艾平《看誰先到》、鄧華《北盤江》、艾平

《搶渡北盤江的前後》、童小朋《禁忌的一天》、王首道《長

征中九軍團支隊的斷片》、艾平《一個團與一個師誰勝》、莫

文驊《五一》的前後》、莫休《由金沙江到大渡河》、一氓

《從金沙江到大渡河》、曙霞《渡金沙江》、艾平《魯車渡尋

船》、艾平《火鬮山》、曾三《一個人帶一根繩》、文彬《從

西昌壩子到安順場》、加倫《十七個》、劉忠《瀘沽到大渡河》、艾平《「保傑」投軍》、艾平《老娘也要戳你一桿子》、廖智高《一個忠實的革命「保傑」》、鄧華《鐵絲溝戰鬥》、謝覺哉《真是「蠻子」》、加倫《飛奪瀘定橋》、羅華生《強渡大渡河瀘定橋的經過》

一九五四年第三期【總第一四期】

(一九五四年四月) 共一四四頁

《中央宣傳部關於徵集現代革命歷史資料的通知(一九五四年四月)》

《中國工農紅軍第一方面軍長征記(下)》

覺哉《抱桐崗的一夜》、黃鎮《回占寶興》、莫休《大雨滂沱中》、覺哉《卓克基土司宮》、舒同《蘆花運糧》、莫文驊《打鼓的生活》、周士梯《還不算空手》、周士梯《吃冰淇淋》、拓夫《瓦布梁子》、童小朋《波羅子》、王輝球《波羅子》、艾平《隔河相望》、莫休《松潘的西北》、必武《從毛兒蓋到班佑》、曙霞《通過草地》、覺哉《藏民生活鱗片》、周士梯《俘虜兵的一束話》、楊成武《突破天險的臘子口》、定一《榜羅鎮》、翰文《過單家集》、莫休《吳起鎮打騎兵》、周碧泉《長征中走在最後頭的一個師》、黃鎮《長征前的紅五軍團》、李雪山《艱苦奮鬥的五軍團》、李治《長征中衛生教育和醫療工作》、必武《長征中的女英雄》、徐特立《長征中的醫院》、定一、拓夫《長征歌》、定一、戈麗《紅軍入川歌》、定一、黃鎮《打騎兵歌》、定一《兩大主力會合歌》、莫休《再佔遵義歌》、莫休《凱旋歌》、彭加倫《渡金沙江勝利歌》、

加倫《戰鬥鼓動曲》、加倫《提高紅軍紀律歌》、彭加倫《到陝北去》、《烏江戰鬥中的英雄》、《安順場戰鬥的英雄》、《紅軍第一軍團長征中經過地點及里程一覽表》、《紅軍第一軍團長征中經過名山著水關隘封鎖線表》、《紅軍第一軍團長征中所經之民族區域表》、《紅軍第一軍團在長征中行軍和休息的時間統計表》

施平《英勇的西征》

一九五四年第四期【總第一五期】

(一九五四年五月) 共一四六頁

李立三《一九一九年至一九二七年中國工人運動概況》

楊塵因《六三運動在上海》

張秀熟《四川初期的馬克思主義運動和社會主義青年團的建立(未定稿)》

(未定稿)

《第一屆至第五屆農民運動講習所介紹》

上海學生聯合會《「五卅」後之上海學生》

一九五四年第五期【總第一六期】

(一九五四年六月) 共一三八頁

蕭向榮《抗戰三年來八路軍的英勇戰績》

《晉察冀邊區抗日根據地是怎樣創造起來的?》

孫志遠《冀中平原上的抗日鬥爭》

白跡《記冀南抗日根據地的開闢》

馬寒冰《南征散記》

陶志泉等《一九三七年至一九四九年上海職工鬥爭情況簡單介紹》

《初稿》

一九五四年第六期【總第一期】

(一九五四年八月) 共一三一頁

吳玉章《第一次國內革命戰爭時期的歷史情況》

康生《上海工人第三次起義的回憶》

林疋編《南昌起義、秋收起義和廣州起義》

涂國林《南昌起義前後的片斷回憶(未定稿)》

中央人民政府南方老根據地訪問團粵東分團第一分隊《第二次國

內革命戰爭時期東江根據地人民革命鬥爭史略(初稿)》

《重要更正》、《啓事》

一九五四年第七期【總第一期】

(一九五四年九月) 共一三六頁

袁血卒《寧都起義的片斷回憶(初稿)》

《從「九一八」到「七七」》

時事問題研究會《一九三七年至一九四〇年抗日戰爭中的軍事

(上)》

一九五四年第八期【總第一期】

(一九五四年一〇月) 共一二六頁

楊林《蘇南敵後抗日鬥爭簡史》

李運昌《熱河抗日簡史》

王夫《抗日戰爭時期冀中蠡縣地道鬥爭的回憶》

時事問題研究會《一九三七年至一九四〇年抗日戰爭中的軍事

《下》

王幼平《回憶寧都起義前後國民黨第二十六路軍裏的一個中共士

兵支部》

中華民族解放先鋒隊總隊部武漢辦事處《中華民族解放先鋒隊概

況》

一九五四年第九期【總第二期】

(一九五四年一月) 共一六四頁

《中央宣傳部關於一九五五年「黨史資料」發行和保管辦法的通

知(一九五四年一〇月一三日)》

周保中《東北的抗日游擊戰爭和抗日聯軍(初稿)》

程子華《冀中平原上的民兵鬥爭》

穆欣《第三次國內革命戰爭時期的中國人民解放軍第四兵團(初

稿)》

一九五四年第一〇期【總第二期】

(一九五四年二月) 共一三三頁

王維舟《四川東部游擊戰爭和紅三十三軍的歷史情況》

徐海東《回憶紅軍第二十五軍的長征》

魏傳統《北進短詩七首》

第十八集團軍總政治部宣傳部編《抗日戰爭時期中國解放區戰場

上的民兵》

穆欣《晉綏解放區民兵抗日鬥爭散記》

「黨史資料」一九五四年第一期至第十期篇目索引

一九五五年第一期【總第二二期】

(一九五五年二月) 共一四二頁

李大釗《再論問題與主義》

和森《武力統一與聯省自治——軍閥專政與軍閥割據》

R《胡適等之政治主張與我們》

中夏《「努力週報」的功罪》

雙林《胡適之與善後會議》

瞿秋白《實驗主義與革命哲學》

求實《評胡適之的「新花樣」》

至愚《一九二二年秋交通界三大罷工之原委》

中國勞動組合書記部《二七大屠殺的經過》

《施伯高傳》

陳修良《回憶李求實烈士》

《讀者來信》

一九五五年第二期【總第二三期】

(一九五五年三月) 共一六一頁

文叔《五四運動的經過》

覺迷、亦癡《五四運動大事記》

何長工《回憶紅軍大學》

「抗大」總校政治部《中國人民抗日軍事政治大學簡史》

胡仁《粉碎國民黨匪幫三次全面圍攻的片斷回憶》

一九五五年第三期【總第二四期】

(一九五五年四月) 共一六〇頁

傅鍾《紅四方面軍創建川陝邊革命根據地及長征情況概述》

顧家熙《介紹「勞動界」和《上海夥友》》

于佩秋《簡介一九二三年至一九三四年間青年團的四種機關刊物——「中國青年」、「無產青年」、「列寧青年」、「青年實話」》

顧家熙、張宗仁《「中國工人」簡介》

張宗仁《介紹「工人之路特號」》

于佩秋《「布爾塞維克」簡介》

夏秋《「紅旗」、「上海報」、「紅旗日報」簡介》

張宗仁《「紅色中華」(瑞金版) 簡介》

張宗仁《介紹「救國時報」》

周寧夏《「生活」週刊評介》

張宗仁《「中國農村」簡介》

《一九三七年至一九四五年新聞界大事紀要》

穆欣《回憶抗日戰爭時期堅持華北敵後新聞工作的戰士們》

范瑾《抗日戰爭時期冀中的新聞工作是怎樣堅持的?》

beings, some were natural phenomena such as mountains and rivers, and others were supernatural beings such as dragons. In the Ming period, it was thought that local gods were nothing other than the result of the operation of *yin* (negative) and *yang* (positive) *qi* 氣, two modes of creative energy 陰陽二氣. The operation of *qi* was considered not only to be a natural principle that constituted the real world, but also to be a spiritual one was beyond human perception, which was worshiped as the gods 鬼神.

Ultimately, the criteria for determining whether or not local gods were suitable for incorporation into national religious services or rites depended on the question of the existence of their miraculous power. Most local government officials emphasized the miraculous power of local gods that brought benefits to the local administration and people rather than the orthodox Confucian standards. The officials reported evidence confirming the miraculous power of local gods to the Department of Rites and recommended putting them in state religious services.

The Ming dynasty was based on Neo-Confucianism thought, particularly the school of Zhuzi 朱子, but, it also made an effort to put Buddhism, Taoism and local gods into the framework of state religious services as much as possible. As such, the Ming dynasty expected the political rule of the emperor in the real world would be aided by spiritual power that would be provided by state religious services.

**A SHORT HISTORY OF THE COMPILATION OF THE HISTORICAL
MATERIALS OF THE CHINESE COMMUNIST PARTY : A CASE
STUDY OF THE *PARTY HISTORY MATERIALS*
PUBLISHED IN THE 1950S**

ISHIKAWA Yoshihiro

The Chinese Communist Party (CCP) began to systematically collect materials on Party history in the late 1920s. In the so-called Yan'an Period, from the middle of 1930s to the middle of 1940s, some important collections of Party documents, such as the *Liuda yiqian* 六大以前 (Documents of the CCP Before Its 6th Congress) and the *Liuda yilai* 六大以来 (Documents of the CCP Since Its 6th Congress) were compiled in rapid succession under the leadership of Mao Zedong, and hereby the compilation of historical materials of the Party was subject to strong political influence. After the establishment of the PRC, collection and compilation

of the Party materials was taken over by the Party History Materials Office (党史資料室), a special organization that was set up in 1951 under the Propaganda Department of the CCP. The actual head of the office was Li Shu (黎澍), a well-known modern Chinese historian. The Party Historical Materials Office published a total of 24 issues of the inner-party periodical *Party History Materials* (党史資料) for four years until 1955, and provided high-level Party leaders with many kinds of historical materials.

It is important to note here that the editors of the periodical, because of the political restrictions at that time, introduced some intentional falsifications when they reprinted important materials. Examples of this are the memoir on the first Party Congress originally written by Chen Tanqiu (陳潭秋) in 1936 for the official organ of Comintern, and Chen Yun's (陳雲) report on the Long March, "A Heroic Trek" (英勇的西征), written originally in 1935 under the pen name of Shi-ping (施平). More specifically, it should be noted that, when the *Party History Materials* reprinted Chen Yun's report, the editors, without any mention, added an additional phrase about the Zunyi Conference: "In Zunyi, the Chinese Communist Party held an enlarged meeting of the politburo, which was endowed with great historical meaning".

We should not overlook the falsifications that the *Party History Materials* introduced more than a half century ago in the early 1950s as a matter of the distant past. The reason is that some historical materials that the *Party History Materials* had falsified are continually being reprinted even now. Unfortunately, the official Party historiographers today are ingenuously reproducing those falsified materials because they know little about the circumstances under which their predecessors were obliged to operate in the 1950s. As a result, for example, both Chen Tanqiu's memoir and Chen Yun's report now in circulation are still the falsified editions of the *Party History Materials*. In this sense, far from being "an ancient periodical," *Party History Materials* is itself important historical material that is of great use in discussing the current state of the historiography of the CCP. In addition, this article provides a list of the table of contents of all issues of the *Party History Materials*.